

禅、武道、茶道、 美術など

日本文化体験交流塾 理事長

米原 亮三

鎌倉時代から戦国時代にかけて、茶道、俳諧、武道、能などの文化が相互に関連しつつ生まれた。その基本である禅宗は、論理や言葉では表現が難しいとされるだけに、一般には理解が難しい。座禅を組み、多くのご住職のお話を聞き、私自身が感じとったことを基本に、こうした中世の文化、とりわけ外国人に説明する要点を以下に書く。

第一は、今を生きることである。禅思想を尊重した戦国武士にとって、大切なのは死の恐怖を克服することである。「切られたら痛い」と思えば、戦えない。死んでも良いと覚悟した人は強い。能はこの世ではなく、人間を超えた世界であり、織田信長は、桶狭間の戦の前に能を舞ったという。禅宗の僧侶である上杉謙信は、常に先頭をきって戦い、敗れたことがないという。皮肉にも死を怖がらないものが生き残るのである。

座禅を組んだとき、和尚に言われた。死後に浄土があるか否かは、誰にもわからない。確かなのは、今、生きていることであり、それだけを考えなさいと。現代、「失敗が怖い」、「評判が気になる」など結果をおそれるあまり、前向きな取組が少ない。真実を求め、ベストを尽くすことは、現代人にとっても大切である。

第二に、和の心である。利休が茶

室への入口を小さくしたのは、大小の刀剣を置かせるためという。茶室では、身分の上下はない。洗心に努め、憤りや恨みなどの感情を茶室に持ち込まない。戦国時代には、兄弟であってもお互いに戦うことがある。だからこそ、茶の湯では、「一期一会」を、二度とないものとして、大切にすべきとされている。

私は、茶会にお招きする外国人に対し、国籍や宗教、戦いの歴史を超えて、心の交流をはかることが茶道の本質であり、この出会いを大切にしたいと説明している。

第三に、静寂の美学である。禅の修行は、座禅や問答だけでなく、畑を耕す、掃除する、料理を作るな

ど、すべての行為である。精進料理では、一汁一菜も残すことは許されず、与えられたものに感謝する。「求心止む処、即ち無事」という言葉は、欲望を膨らまさないければ、禍も起きないという意味である。高収入を得るために、深夜まで働く。ブランド物欲しさに、罪を犯す。こうした欲望の追求が、身体や精神のバランスを壊すことに警鐘を発している。

超越的な孤絶性、つまり「わび」や「さび」の美学は、枯山水の庭園や茶わんなどに見られる。広い空間を埋めつくすことなく、物を配置したり、描くことにより、対象物を際立たせ、素朴な素材のなかに本当の真や美を見出す。西洋のような豪華な盛り花ではなく、花と花の間の空間も重視する日本の華道がある。薄い味付けのなかに、素材の良さを生かすのが日本料理である。

私は、こうした日本文化に誇りをもち、現代に意味を再発見して、世界に発信する活動を続けている。

